



■ 漆紙文書文書を読む

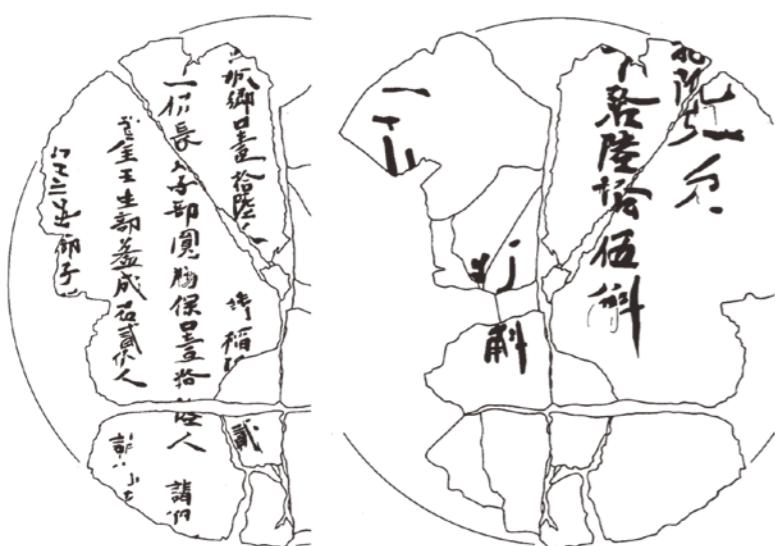
ここで紹介する漆紙文書は、西門東側地区の鍛冶工房から出土しました。平安時代には、紙は貴重品ですから、徹底的に再利用しました。現代でもコピー用紙の裏を使うように、裏表を使い、最後は漆容器の蓋紙となったのです。

表面は、正式な文書の断片です。書かれている内容は、出羽国置賜郡宮城郷（現山形県）の保長である丸子部圓勝さんが、集落を代表して16人分の種まき用の稻束を役所に請求したもので。その内訳として、壬生部益成さんの家が2人分、□部子□…と続いたようです。

裏面はメモ書きで、「□（下力）給陸拾伍斛」と書かれており、お米を65石（約3,900kg）支給したというものです。

お米は、今も昔も私たちの生活に欠かすことが出来ません。この文書にも、生活や仕事に密着したやりとりが記録されていました。このような帳簿類は国が管理していました。不要となって放出された後、どのような経緯で払田柵にもたらされたのでしょうか。

表面



裏面



※アニメキャラクター、柵磨呂(さくまろ)くんは、大仙市及び大仙市教育委員会から提供を受けたものです。



払田柵跡に関するお問い合わせは

●発掘調査に関するご質問

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 〒014-0802 大仙市字牛嶋20番地
tel.0187-69-2442 fax.0187-69-3330

●復元された史跡公園に関するご質問

大仙市教育委員会文化財保護課 〒014-0805 大仙市高梨字田茂木10番地
tel.0187-63-8972 fax.0187-63-8973

●その他現地での窓口、ボランティアガイドに関するご質問

大仙市払田柵総合案内所(4月~11月)
(大仙市仙北支所) 〒014-0802 大仙市字仲谷地95番地
tel.0187-69-2397 (fax兼)
tel.0187-63-3003 fax.0187-63-3015



払田柵跡 だより

平成29年3月31日

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所



払田柵跡だよりは、発掘調査から明らかになった、いろいろな発見を、みなさんにお知らせするためのたよりです。今回は政府の西側で行われていた、ものづくりの現場について、くわしく紹介します。



平安時代の工房群がつくられた階段状造成



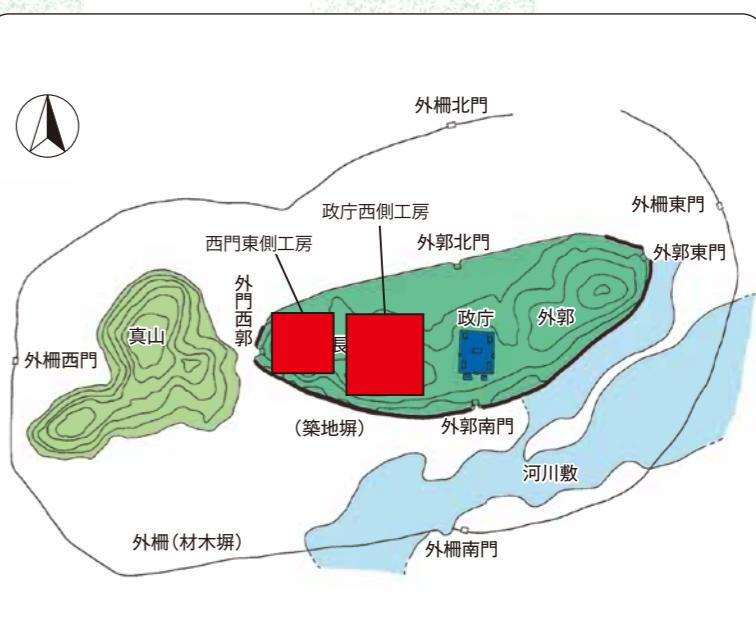
階段状造成を利用して中世には土塁・空堀となった

大仙市仙北地域マスコット
柵磨呂くん

■ 政府の西側は職人たちの仕事場

払田柵跡は、9世紀初めにつくられた城柵遺跡です。城柵とは、東北地方を支配するために各地に置かれた役所です。遺跡の中央にある長森丘陵は東西に細長くのびる楕円形で、落花生のような形をしています。丘陵の東西がフタコブ山となって高く、中央は低くぼんやり平坦面がつくり出されています。この中央部に役所の中心施設である政府がおかれて、東側の小高い丘の上には文書作成や租税の計算などの行政機能を担った地区があります。

西側の小高い丘には、役所で使う道具類をつくり修理したりした鍛冶工房や漆を使う作業場がまとめられており、多くの職人が働いていました。



長森丘陵西側地区の工房群位置



■ 生産に関わる施設 西半部の鍛冶工房

長森西側の小高い丘の上にある平坦面は、西半部（外郭西門東側）と東半部（政府西側）に分けられます。西半部と東半部は、時期によって少しずつ場所を変えながら、鍛冶工房域として使われていました。

外郭西門に近い北側の斜面では、9世紀中頃～後半代の鍛冶工房群が確認されました。また南側斜面の上位には9世紀中頃の竪穴建物跡と板塀跡が見つかりました。斜面中位では鍛冶炉を持つ掘立柱建物跡から金床石と工人が足を入れる穴がセットで確認され、金床石には鉄をたたいた時に飛び散る鉄片（鍛造剥片）が付着していました。

また、工房の近くには鍛冶炉を持たない竪穴や掘立柱建物跡が設けられており、これらは工人たちの仕事を監督していた建物と考えています。

鍛冶工房群の東側には、板塀を挟んで堀濠などの遺物を出土した竪穴建物跡が見つかり、銅の鋳造に関わる施設と考えられます。

9世紀後半～10世紀前半には、南側斜面に鍛冶工房が移動しました。



北側斜面中位整地面西側の鍛冶工房跡（北から）

掘立柱建物跡を上屋とする鍛冶工房が並び、奥の工房からは鍛冶炉と金床石、足入れ穴がセットで確認されました。



北側斜面中位

この付近には規模の小さな掘立柱建物跡が集中していました。



■ 東半部の鍛冶工房

政府西側に隣接する少し高い部分では、北側斜面を中心に、9世紀後半～10世紀前半代の鍛冶工房群が密集して見つかりました。

特に、斜面の中程では東西60m、南北40mの2,400m²の範囲に、約250基もの鍛冶工房が重複しながら操業していました。

斜面の上位には鍛冶炉を持たない竪穴建物跡や掘立柱建物跡があり、何らかの工房とその管理建物と考えられます。この付近の竪穴から、渤海産の可能性のある瓦質土器や仏鉢形土器など

の特異な遺物が見つかり、この工房域に関係した祭祀遺構と考えられています。

また、北側斜面の下位は土取り穴群となっていて、鍛冶関連の施設構築に伴うものと考えられますが、外郭北門周辺の低地部への盛土整地等のために土を取った可能性もあります。

9世紀後半～10世紀前半には、南側斜面に鍛冶工房が移動しました。



北側斜面中位の鍛冶工房（北西から）

同一箇所で床面の嵩上げが繰り返され、工房跡が上下に重複してつくられています。



溝跡から出土した土器群

鍛冶に関連し、地鎮などに使われた祭祀遺物と思われます。



渤海産の可能性のある瓦質土器